舞姫の眷属

拓里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

舞姫の眷属

【Ｎコード】

Ｎ３９４８Ｎ

【作者名】

拓里

【あらすじ】

俺の名は、神崎拓也。水流園（つるぞの）流舞踏宗家の分家である神崎流の三男坊

水流園（つるぞの）流は戦国時代に虐げられ、犯され、なすすべもなく殺されていく女達の為に編み出された舞踏と聞く。その動きは華麗にて優雅、見るものを引き込まずにはいられない妖艶な『舞』されどその本質は『武』にある。わが身を守り愛するものを守護する『武』。その『武』極めれば一騎当千とまでいわれ恐れられたが、戦国時代、乱れた国を愛し守護する訳もなく、戦場にて全く役に立たない『武』

であったために、時代の表舞台には出る事はなかった。

序章

序章

俺の名は、神崎拓也。水流園流舞踏宗家の分家である神崎流の三男坊
水流園流は戦国時代に虐げられ、犯され、なすすべもなく殺されて
いく女達の為に編み出された舞踏と聞く。その動きは華麗にて優雅、
見るものを引き込まずにはいられない妖艶な『舞』されどその本質
は『武』にある。わが身を守り愛するものを守護する『武』。その
『武』極めれば一騎当千とまでいわれ恐れられたが、戦国時代、乱
れた国を愛し守護する訳もなく、戦場にて全く役に立たない『武』
であったために、時代の表舞台には出る事はなかった。

◆
◆
◆

ヒュ～ド～～ン　今日は、俺の街の花火大会。いつもは静かなこの
街も、この日ばかりは近隣から多くの人が集まり賑やかになる。

「兄様　今年の花火も綺麗ね～」

などと、ほざきながらその両腕を俺の左腕に纏わりつけている。気
のせいか？俺の左腕に胸を押し付けていると感じるのは勘違い？確
認の為にと聞いてみると

「うう～ん　態とだよ。いいじゃない一緒にお風呂にはいる仲だし
～♪」

「いつの話してる？　それ昔、昔大昔、お前が赤子のころだろが～～」

この天然娘、名を水流園（つるぞの）　舞。俺より３歳年下の１７歳、水流園舞踏宗家長女であり、次期当主（予定？）でもある。黙っていれば美人なんだろうと思う、凛とした美顔に細く切れ長い眉が、切れ長の瞳に似合い、髪は漆黒で長い後ろ髪をリボンにて螺旋巻きに固定して、長く垂らしている。白い肌は肌理が細やかで透き通っているかの様だ。黙ってさえいれば何処かの姫と言われても納得するが　そう黙ってさえいれば・・・

「どうしたの？兄様？　そんなに見詰めて、惚れ直した？」
「舞、『惚れ直した』の意味は、好きだった人を、もっと好きになった時に使う言葉だと思うが、幸か不幸か俺は舞の事を、惚れたと思ったことはないぞ」

「・・・チェ」

ん？舌打ち？いやいや幻聴だろ、最近俺疲れてるし・・・
舞は理解しているのだろうか俺達の関係を・・・幼馴染であり同じ流れを汲む一派ではあるのだが、それ以上に俺と舞には・・・・・・

◆
◆
◆

「舞、そろそろ始めるぞ」
「うん、わかった」

俺達は今、花火大会中は立ち入り禁止区域になる、街が一望できる霊山の中腹にあるお堂にいる。花火大会中は街の人口が数倍になり、賑やかになるのはいいのだが、厄介なのは人の思いである。人は善意と同じ量の悪意を持つ生き物であり、陰陽道で言う殺生　偸盗　邪淫　妄語　飲酒　の五悪の悪意もこの街に入ってくる。人一人の小さな悪意も多く集まれば五悪に為りかねない。そして人は悪意に目覚めると、より大きな悪意に引き寄せられ集団を作り、やがて街を侵食していく。表向き煌びやかで華やかに見える世界、裏に廻れば魑魅魍魎のすむ世界。必要悪だと言う人もいるが少なくとも霊山の麓、街の守護者、水流園流舞踏宗家がいる地では必要ない。、ならば花火大会なんかしなければいいと思うのだが、街の人が楽しみにしてるし、経済効果とやらで街が潤うので中止はできないらしい。
そこで街の守護者である水流園（つるぞの）流舞踏宗家が、毎年『浄化の舞』を奉納している。ここ数年、俺と舞がその任にあたっている。

「ピィヒュ～ピィヒャラ～ピィ～」

俺は篠笛（竹の横笛）を吹く。その音色は甲高く鋭くもあり、また暖かく柔らかくもあった。神崎拓也の吹く篠笛はお堂の周りの音を打ち消していく
虫の鳴き声、鳥の囁き、そう今まで鳴り響いていた花火の音さえも打ち消していく。今、霊山は篠笛の調べ一色に染まっている。その調べは街の人々の
耳に届く事はないが、その魂に静かに、そして深く浸透していく。

一方、舞は巫女衣装に身を包み、お堂の中央で眼を閉じて、その調べに身を任せている。そして音色が人々の魂に浸透していくのを感じると一対の扇を開き
両手を天に掲げる。『浄化の舞』の始まりである。『浄化の舞』は水流園流舞踏の基礎であり又奥義でもある。その動きは水の流れにあり
優しく静かに舞う姿は、せせらぎを現し人々の苦しみや悲しみをそっと包み込む。激しく舞う姿は滝壺に落ちる水を現し、人々の嫉妬、妬み、憎悪を
洗い流す。その想いを『霊波』に変え、神崎拓也の吹く篠笛の調べに乗せて人々の魂に送り込む。約一時間程、華麗に『浄化の舞』を舞う。
そして・・・

「ハァハァハァ・・・ごめんなさい」
「謝ることはない去年より数段上達している。がんばったな」

そう舞は、去年より格段の進歩をとげている。しかし『浄化の舞』は奥義でもある。次期当主（予定?）でも完全に習得するには後数年はかかるだろう
それに今年は例年に比べ大幅に見物客が増えている。この街の花火大会に来ると、気持ちが落ち着くとか、体の調子が良くなる、心が洗われるなど
近郊の街々では囁かれ、一部都市伝説化されているみたいだ。

「後は俺がやる。舞、篠笛を頼む」
「はい・・・お願いします・・・」

俺は舞う予定ではなかったので、黒のシャツ、黒のズボンと一振りの小太刀。その出で立ちでお堂の中央に立つ。我が神崎家には『浄化の舞』はない
神崎家が得意と磨るところは『剣舞』

「神崎流師範、神崎拓也、小太刀の舞壱式『阿修羅』参る」

神崎家、家宝刀雷丸(いかずちまる)を一閃、同時に篠笛から、雷鳴のごとく激しく、鋭い音色が辺りに響き渡る。『阿修羅』に浄化の作用はない
悪霊　悪鬼　魑魅魍魎を滅する剣技。対極図の『陽』を司る水流園(つるぞの)流、『陰』の神埼流。神気と邪気、又は正義と悪と言い換えてもいいだろう。悪しき心に染まりし者は、どんなに大きな正義にも平(ひ)れ伏す事はない、己が滅するその日まで、平れ伏すのは、より巨大な悪（恐怖）のみである。ならば悪しき心に染まりし者に悪（恐怖）を、それが神埼流の教えであり使命でもある。

雷丸に邪気を籠め舞う。そして一気に街に放つ

「　オンキリキリバザラウンハッタ　万魔拱服！」

身震い磨る物、我が身の両肩を握り締め蹲る者、失神磨る物。舞の浄化を受け入れなかった者の心に恐怖を植付ける、それが『阿修羅』ま、俺も舞も、それほど強い『念』を送り込んではないので街を離れ暫くすれば、元に戻るのだが・・・人の心とは摩訶不思議である。後日談ではあるが、新たな都市伝説が囁かれたのを、二人は知る良しもない・・・

◆
◆
◆

「・・・おつかれ・・・兄様」
「舞も、ごくろうでした。来年は俺の手を煩わさないようにね」
「・・・はい・・・精進します・・・」

悔しかったのだろう、舞は俯いたまま、右手に拳を作り握り絞め、小さく肩を震わせている。
舞の年齢なら、ここまで出来る事事態すごい事ではあるのだが・・・

「じぁ、帰えろうか。まだ祭りもやってるし、お土産でも買いにいく？」
「奢(おご)り？」
「いいよ。でも屋敷の皆のおみや・・・・・」
「兄様～　舞は、たこ焼き　いか焼き　クレープ　りんご飴　それから～　焼きそば　東京ケーキそれと・・・ｅｔｃ・・・」
「・・・」

俺は、屋敷の皆にお土産を、買って帰ろうね。と言いたかった。が瞳をキラキラさせながら、満面の笑みを俺に向けてくる。

（え？？　今まで悔しかったんじぁないの？肩震わせてなかった？
あれ演技？・・・でも・・・ちくしょう～可愛いじぁね～か）

だが問題がある。女性は奢りに弱いの？、舞だけ？　たぶん舞だけだと思いたい・・・　兎に角、舞は『奢り』の単語が大好きだ其れ

を聞くと
舞の胃袋は、ドラエモンの異次元ポケット状態になる。怖いよ～

「舞　すまぬ。そこまで持合せがない・・・」
「いいよ～貸しといてあげる～♪」
「え??」

普通そこは、じぁ、自分の分は出すね。　とか言わないの?俺が変なの?　その辺りをやんわりと聞いてみると

「う～ん　私の座右の銘は『奢(おご)れる者には藁(わら)をも縋(すが)れ』だから、いいの」

舞、微妙に違うと・・・いや明らかに間違ってるぞ。俺はツッコミをいれたい・・・だが糠(ぬか)に釘、豆腐に鎹(かすがい)
馬の耳に念仏、暖簾(のれん)に腕押し、柳に風・・・そう、言っても無駄なのだ。過去の経験で嫌と言うほど味わっている・・・
俺は肩を落とし頭を垂れお堂を出ようとした・・・

「舞!!」
「はい!」

舞も気づいている、異質な気配。俺は舞を俺の背後に下がらせ、雷丸に手を添えて構える。
獣でもない、人とも微妙に違う、悪霊、悪鬼、魑魅魍魎の類でもない。

「何者!」

「・・・・・・ミ・ツ・ケ・タ・　　ヤ・ッ・ト・ミ・ツ・ケ・タ・

」

「誰だ！　何用だ！」

俺は異質な気配に向かって雷丸を抜刀しようとする手を、舞が押さえて

「待って兄様、邪悪な気配ではないわ」

それは俺にも解かるが、しかし危険がない分ではない、守護する者として、多少でも危険があれば排除する、それが俺の使命でもある。俺は前に出ようとしたが

「下がりなさい兄様、これは『命（めい）』です。」

主の『命』は絶対である。俺は、ある事件で舞と眷属の契りを交わしている。俺と舞は幼馴染でもあり、主と守護者でもある。

「・・・御意」

「で、あなたは誰なのですか？私達に何か御用ですか？」

「助・け・て・・・お願い助けて・・・私を、私達を私達の世界を・・・」

それはお願いと言うよりは、悲痛な、心からの懇願に聞こえた。が眷属である俺には響かない。舞以外の事で叶える気どころか聞く耳すら持合せてない。

それどころか俺は、『溺れる者は藁をも掴む』これが正しい言葉で今みたいな時に使うんだよ、舞。などど考えていると

「いいよ！　助けてあげる」
「・・・ア・リ・ガ・・トウ」
「待て～　舞、はやま・・・」

俺が言い終える前に、俺達を眩しい光が包みこんでいた。やがて光が消えたお堂には二人の姿はなかった・・・・

1　章　召　還（前書き）

初めまして。作者の拓里と申します。

序章の段階で3件もお気に入り登録、驚きました・・・そして有難う御座います

私は超初心者ではありますが、楽しく読める小説が書ければいいな～

解かりにくい文章、誤字脱字も多々あろうかと思いますが、大きなお心で読んで

いただければ幸いです。

1章　召還

1章　召還

眩いばかりの光が、消えていくと辺りの景色は一変していた。先ほどまでは夜だったのに、今は太陽が頭上近くまで昇っている。
舞は、辺りをキョロキョロしながら

「兄様、ここは何処でしょう??」

俺達は今、湖のほとりにある雑木林の中にしゃがみ込んでいる状態である。
俺は、立ち上がりながら

「何処だと思う?舞?」

「ん～と　異世界だね。此処は」

「何故そう思う?」

「もちろん『感』」

流石です舞ちゃん。感で其処まで言い切れる人はあなただけです。
…　…
だが強ち間違ってないと思う。
今まで居た場所が夜８時、此処は太陽の位置からすると朝１０時前後、時差１４時間

だとすると、アメリカ辺りてのもあるが、アメリカなら態々召還なんて面倒な事をしなくても電話の1本もすれば済む。
　声の主は、最後に私達の世界　と言っていた
俺達のいた世界で、世界規模の異変があれば俺も気づく筈だし
それに・・・

「舞、気づいているか？」

「はい、瘴気ですね。これは」

「まだ薄い瘴気だが、浴び続けれは、人も動物も正気では居られなくなるな」

「プップップゥ～」

「？？？」

「兄様面白い～　瘴気と正気　流石です～」

「…　…」

まったく緊張感のない舞であった。

もういいや俺　帰る。

「舞、もう帰りたいんだが…　…」

「ダメです。私と兄様の力があれば帰ることも出来ると思いますが、

まだあの声の主に会ってません。」

「じぁ～俺だけでも帰して」

え～てな顔で俺を見上げ、私を1人にするの？　か弱い少女を異世界に置いて帰るの？的な事を、瞳をウルウルさせながら訴えてきやがるこの娘…　…　チクショウ　カワイイジァネイカ

「はいはい　居ます。いえいえ居させて下さい。これでいいか」

舞はニカッと微笑み

「仕方ないな～居させてあげる～」

「…　…」

「だが舞。俺達は、あの声の主に会っても何も出来ないぞ。舞も知ってるはずだが、
我が水流園一派は守護する者以外は、『不介入』の掟がある。
そして守護する者を決れるのは、当主様のみ。」

「知ってます。ですがここは異世界？当主（お母様）は、いない。
ならば次期当主（？）の私が決めればいいのです。」

「それは屁理屈かと」

「屁理屈も、ごり押しすれば道理なり　ｂｙ舞」

左手を腰に当て、白い歯を見せニカッと笑いながら、俺に向けて右手を突き出し、

？サイン！

ああ頭が痛くなってきた…　…　帰りたい

こちらに来てから舞の様子が何か変だ。陽気？弾けてる？

いやぶっ飛んでるとでも言うのか

向こうに居た時も多少はその傾向もありはしたが、明らかに様子が違う。

舞に聞いてみると…　…

「え～とね。親に許されない二人が、手に手を取って家を飛び出し、逃避行の末、異世界に迷い込み苦難を乗り越え、幸せにな・・・」

「ちょい待て、何の話をしている？」

「さっき見た予知夢」

「…　…まだ寝てないし、舞にそんな能力はない。」

「むぐぅ・・」

「で、舞。真意は？」

舞は肩を落とし、頭を垂れ小さな声で語りだした。

「私は、水流園家の嫡子に生まれ幼き頃から皆に
　次期当主と言われ続けてきました。
私は皆の望む通りの言葉遣いも、立ち振る舞いも行ってまいりました。
それが決して嫌な訳ではありません。
水流園家の嫡子に生まれた事は誇りに思いますし、皆に慕われている事は
　嬉しく感じます。　ですがそれは本当の私ではないのです。
　そして此処に転移された時、此処が異世界なら私を知る人は兄様しかいない
ならば私は、水流園家の嫡子でもなく次期当主として振る舞わなくてもいい
只の舞として、その姿を兄様に見てもらいたい、知ってほしい本当の私を…　…
たとえ其れがあの声の主に会うまでの僅かな時間だとしても…　…
そう想ってはダメでしょうか兄様」

舞の瞳がうっすらと光っている。
くそぅ、俺は、今まで舞の何を見ていた、何を知っていた。幼き頃より仕えていた俺は
水流園家の嫡子で次期当主、頭では大変だとは思っていたが、そんな生半可なものではなかった。

舞に圧し掛かってた重圧は・・・　・・・
俺は自分自身に腹が立った、言い様のない怒りが込上げてくる。
持って行く行き場のない怒り
俺は震える手を握り絞め、奥歯が折れそうなぐらい噛締め、地面を殴った。

「そう想ってはダメでしょうか…　…兄様」

「舞、すまなかった。今まで気づいてやれなくて」

「いえ兄様には、良くして頂きました。兄様が居なければ今の私はありませんよ。」

「舞、お前の好きにすればいい。水流園家の嫡子で次期当主だろうと只の舞だろうと、俺に執っては大切な舞だよ。」

（ありがとう。そして・・・・・・大好きです・・・　・・・兄様）

「で、舞これからどうする?」

「え～と　もう少し待つ?　声の主が探して来てくれるかな?」

待つのなら、俺は寝るとしよう。舞は近くを冒険すると言うが、ま、危険はないだろ。

「オンバサラ、ヤキシヤウン　入式神見壱巻　川蝉」

俺は、二枚の護符を空に放り、言霊を唱えると二匹の『川蝉』に変化した。

「舞の護衛と、辺りの探索を頼む。人もしくは集落を探してくれ。」

「「畏まりました。主様」」

一匹は舞の上空を旋回し、一匹は上空を数回、旋回後、西の空へ飛んで行った。

俺は近くの岩の上に横たわり眼を閉じる。

俺は、夢を見始めた。思い出したくない、だが決して忘れらない過去。

1　章　　召　還（後書き）

次回は、過去編になります。二人の出会いから壮絶な経験・・・うまく書けるとは思いませんが、気持ちが伝わる文章が書きたいです。

1章を読んで下さった皆様方。感謝です。有難う御座いました。

過去　？

２章　過　去　？

俺が初めて舞に会ったのは、１３年前に遡る。１月年始の挨拶に、本家筋にあたる水流園家に行く、親父殿に付いて行った時である。
　この地域は平年は雪はあまり積もらないのだが、昨日迄、異常寒波の影響で、除雪車が出るほどの
　猛吹雪であったが、今日は寒波も去り、打って変わって日本晴れ、生まれて初めて見る銀世界に
　少し浮かれぎみ。両脇に１ｍほど除雪された道を歩いて行くと、屋敷の門が見えてきた。
　門の手前にある広大な駐車場には、数え切れない程の高級車、それも運転手付き

「親父殿、これ全部新年の挨拶に来てるの？」
「だろうな。政財界、裏の世界、名の通った奴は殆ど来るんじゃないかな
　だが、御館様に会えるのは、ごく一部だがな」
「え～じゃ会えないの？お年玉貰えるかなと思って、付いて来たのに……」
「アハハハァハ　運が良ければ会えるさ」

俺達は屋敷の門、よく言えば、畏怖堂々、風格、威厳を感じさせ、見る者を圧倒する門構え。幅３ｍ
高さ６ｍが、２門あり手前に観音開きになっている。が俺に言わせれば無駄に大きい門にしか見えないーー
そりぁー俺だって初めて見た時は、……

その大門の横でーー

「早く開けんかー！わしは、曽我部、曽我部大吾じぁー！　態々東京から来てやったんだー！」

インターホンに向かって、小太りで中年、はげ頭、キラキラした下品なスーツ、両指には高そうな宝石
品性の欠片も無い様な男が、二人の黒服を従えながら、顔を真っ赤にして怒鳴り散らしている。

「ですから訪問客の皆様方には、左手にある御小門から、入って貰います。」
「わしに、この寒空で、あんな列に並べと言うのかーー！　後で後悔するなー！」

怒りが収まらないのか、捨て台詞を吐き大門を蹴り、駐車場の方に歩いていった。

曽我部大吾は知らない。無知は、それだけで罪である事を……
水流園（つるその）家に、年始の挨拶に来れるだけでも凄い事を知らない…
彼は東北地方の旧庄屋で、広大な田畑を所有していた。そこに新幹線が通り、都市開発で
莫大な資金を手に入れ、それを元手に、次々と企業を買収し、今や飛ぶ鳥を落とす勢いの、グループの長で
あった。
知人の薦めで、渋々来たのだが、高々舞踏家の家で、この様な扱いを受けるのが我慢為らなかった。

だが、この時この瞬間、彼の……命運は尽きた……

一年も経たず、会社は倒産、グループは解体、莫大な借財を抱え一家は離散、彼自身も夜逃げ同然に
街を追われ、その後、彼を見たものはいない……

この世に、もしもは無いが…　もし彼が水流園（つるぞの）家の事をもう少し知っていれば……
もし彼が怒りに身を任せず、辺りを見渡せていれば……
そう彼が侮辱した行列には、日本で名家、名門と云われる人、旧財閥の人達も並んでいた…

「親父殿、あの人、もの凄く怒ってましたが、大丈夫？」
「あ奴は、もう終わりだな」
「えーー！　御館様が何かするの？」
「御館様は、この程度、何もしないさ。だが見てみろ」

そう言いながら、親父は左に視線を向ける。その先には、行列の人々ー！
人々の視線は、怒りながら歩いていく男の背中に向けられている。
冷やかな視線、哀れみの視線……
その中に怒気を含んだ視線も幾つかあった。

（あー　そう言うことですか）

無知は罪なり。　俺は去り行く男の背中に心の中で合掌したーー

◆

「親父殿、俺達も早く並ばないとーー！　中に入れないよー」
「そうだな。じぁ行くか……ちょっと待て、拓也。面白い物見せてやる」

そう言うと親父は、ニャリと意味不明な顔をし、インターホンを押すーー

「俺だー！　今年は息子の拓也と来た、大門開けろー！」

ほぇーーー！何を、何を…ほざいている馬鹿親父ーー！
俺は慌てふためき、ごめんなさいーごめんなさいー　監視カメラに向かって何度も、何度も頭を下げた。

「……畏まりました」
「ほら見ろ馬鹿親父ー！　怒ってるじぁないかー！『畏まりました』??え??え??」

ギィギィギーー、その大門は内側に向けて、ゆっくりと動き出した。

「ほぇーーー！」

俺は、何が何やら、さっぱり状況が読めず、只々、口をだらしなく開け、大門が開いて行くのを眺めていた。
だが俺だけではなく、驚愕の面持ちで眼を見開いて、大門を見つめる集団があった。そう御小門に並んでいる人達だ。
それはそうだろ、俺は母親から、この大門は『開かずの大門』と言われ、
歴代の当主と数人の選ばれし者だけが通行できると聞かされている。
だが、当代の当主は、何故か大門を好んで使用しない
過去5年で大門が開いたのは2回程で、あったらしい。
呆けていた人々から、ザワザワとざわめきが起きる。

「……大門が……初めてみた……」
「……何者だ？あいつは？」

そう、その男は、ごくごく普通の身なりで、風格も威厳も感じさせない。それは一般人にしかみえない。
そして誰かが、ポツリ…

「……神崎……源一郎…」

「えー！あれが神崎流舞踏家、家元神崎源一郎かー！」

それは先程とは明らかに違う、畏怖を混めた驚愕の面持ちで見つめている。

水流園（つるぞの）対極図の『陰』を司る。『闇の神崎……』

俺達は大門に一歩足を踏み入れた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3948n/

舞姫の眷属

2010年11月11日02時18分発行